

前号で好評だった「宣教師と KG ファイターズ」の後編原稿提出の際、「バスカム先生とスラッシャー先生の部分が短いので、どなたかこのお二人の思い出を書き足してくださる方はおられないだろうか」と、執筆者の武田建先生から相談を受けました。そこで、バスカム先生の思い出を小浪寿文さんをお願いしました。私は商学部卒業なので、スラッシャー先生のことを書きました。さらに、武田先生原稿に登場する神学部のブレイ先生の後任宣教師であるクラウチ先生のことを辻学先生が書いてくださいました。

今回は、ブレイ先生、ジョイス先生、バスカム先生、スラッシャー先生、クラウチ先生と、昭和の懐かしい宣教師の先生方が次々に登場します。
(学院史編纂室 池田裕子)



宣教師と KG ファイターズ（後編）

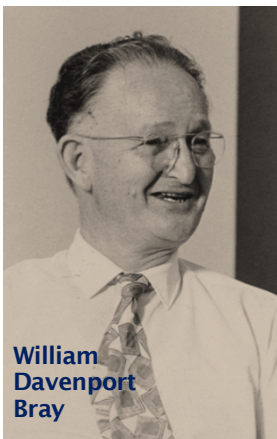
武 田 建

★カイロ（ブラクティック）のブレイ先生

ミッシヨナリーが住む外国人住宅の奥から二番目にブレイ先生ご一家が住んでいらした。1953 年 9 月、宣教師として来日し、神学部教授に就任された。以来、1980 年 9 月のご定年まで神学部教授を務められ、その上、宗教総主事や学院の評議員や理事を歴任された。先生のお父上のご職業は、うかがったが忘れてしまった。ただ、私の記憶では、ブレイ先生のカイロブラクティックは父君の影響が大きかったようだ。私の母が腰痛で困った時、教会の仲間からブレイ先生を紹介されて、ずいぶん楽になったと喜んでいて記憶がある。

1967 年頃、毎年 6 月初旬に関西で西宮ボウルというゲームが組まれていた（第 1 回西宮ボウルは 1954 年）。この試合を始めた頃は、卒業生を入れた東西現役 OB のオールスター戦だったが、ここに登場する下村勝君が上級生になった頃は、関東と関西のリーグで前年度優勝したチームとその OB の合同チームを招待して、

試合をしていたように思う。西軍は、私が攻撃担当で監督、守備はコーチの瀧悠喜夫氏だった。守備陣の一番後ろを守るのが下村君であった。ところが、彼は試合の二日前の練習で大腿部を痛めてしまった。さあ困った。彼の代わりになるような選手はいない。「溺れる者は藁をもつかむ」心境で、彼を連れてブレイ先生のお宅へうかがった。生まれて初めて見るカイロの実演である。幾つかの部分に分かれるようになっていベンチの上に下村選手を寝かせて、彼の身体を押したり引いたりすること約 10 分。今日の治療は終わった。下村君に、「立って動いてごらん」と言うブレイ先生。あら不思議。来るとき足を引きずっていた下村君は、結構歩き回ったり、身体を伸ばしたり縮めたり出来るではないか。「試合は明後日ですね？」と念を押した先生は、「明日また来てください」と言って下さった。試合は関学の大勝利。一度、明治のランナーが中央を抜けてタッチダウンしかけたが、最後尾の選手が一発のタックルで仕留めてくれた。タックルしたのは下村君だが、私には、ブレイ先生がグラウンドに入っていて、タックルして下さったような気がした。先生、有難うございます。



William
Davenport
Bray

★ジョイス家の皆さん

1967 年度の関西学院は、学費値上げに起因し、多くの困難な事態に直面した。卒業式当日、本部棟が学生に占拠され、バリケードで封鎖されたのもそのひとつである。そのバリケードを教職員・学生が皆で撤去しようとしていた時、一人のアメリカ人教師がやってきて手伝ってくれた。これが、社会学部着任 1 年目の宣教師、ジム・ジョイス先生だった。仕事が片付いたので、「ジョイス先生、貴方はフットボールはどうだ？」と尋ねると、やったことはないが、見るのは大好きだと言う。残念ながら、コーチはして貰えないが、家族分の声援は確保できた。出来るだけ招待券を贈ることにしよう。

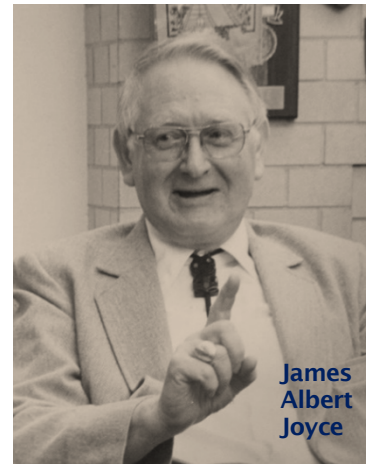
フットボールの試合になると、ジムはいつも応援に来てくれた。ときには仕事か教会で何かあったのだろう、「欠席」することもあったが、やがて、お嬢さんで、カナディアン・アカデミーの生徒だったジュディもフットボールが大好きになってきた。試合だけではなく、彼女は自転車に乗って練習も見に来てくれた。私は応援に来てくれたと思っていたが、どうやらワイドレーシーバーの志浦康之選手がお目当てだったようだ。

リーグ戦も後半になり、甲子園ボウルともなると、父娘だけでなく奥さんのジーンも一緒に応援にきてくださった。ジュディは何処で手に入れたのか、サイレンの音を出す道具まで持ってきて、関学がタッチダウンする度に、「ウー」という音をスタンドいっぱいに聞こえるように鳴らし、やがてサイレンは甲子園ボウルのちょっとした名物になった。

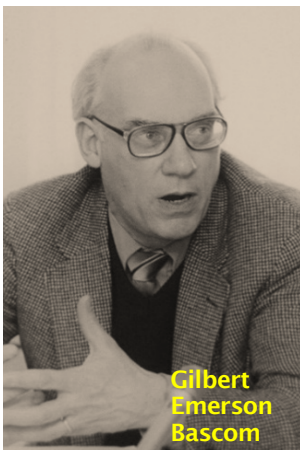
私は監督であり、コーチであるから、試合中は大概グラウンドのベンチ前に立っている。試合に夢中になっているから、観客がどうしているかはあまり関心がない。しかし、観客が少ないときには、何となく淋しい気がする。フットボール自体は、できるだけ米国の最新の作戦を勉強してやっているつもりだが、米国大学チームの試合のように、あの短いスカートをはいたお嬢さんのチアリーダーがいてくれたら、もっと楽しいのと思った。

「建ちゃんがコーチすると高うつくな」という徳永さん（前編参照）のお言葉の通りだ。今回もまた、徳永さん、前監督の父君である鳥内昭人さん、OB 会長の布谷武治さんに話して出費をお願いしたが、あまりひんぱんなので、さすがに気が引けて、私も4分の1口持たせて戴いた。こうして、紺のTシャツとスウェット、それに女子テニス選手がはいっているようなスカートをミズノにお願いした。これで、バトンのお嬢さんをチアリーダーにコンバートすることに成功だ。バトンでは実力ナンバーワンの水野啓子さん（現水野バトンスクール代表）が、「バトンが本職だけど、チアリーダーもやってみましょう」と言って下さった。彼女は武田ゼミの3年生、「ノー」とは言い難かったのだろう。スミマセン。善は急げ、電話でおおよそのことはお願いしておいた。ジョイス夫人のジーンさんに、バトントワラーのお嬢さんたちをチアリーダーに仕立てていただくのだ。あとは、新米チアリーダーをジョイス家にお連れして、ジーンに紹介するだけだ。

チアリーダーがどのくらいジョイス夫人と練習できたのかは定かでない。次の試合から、チアリーダーの登場である。ベンチにいて、次の攻撃プレーをフィールド内の選手に送る役目を担っている私には、チアリーダーがどんなパフォーマンスをしているか分からない。ボールが相手のチームに渡り、関学が守備にまわった時、ベンチから後ろをちらりと見たが、新米チアリーダーは「プッシュバック、プッシュバック、ウェーイバック」と、恥ずかしそうに小さな声で叫んでいた。その年の甲子園ボウルはチアリーダーのお陰？もあったのだろう。34対6という大差で日大に勝つことが出来た。しばらくして、卒業する選手とチアリーダーの4年生を我が家に招いて送別会を開いた。チアリーダーのお嬢さん方は、フットボールの試合を見るのも初めてだったし、英語の掛け声や号令を言うのも大変だったと、苦労話をしてくれた。きっと、ジョイス夫人はもっと大変だったと思う。夫人は、1990年5月28日に天に召された。残されたジョイス先生は、1993年3月の定年まで関西学院で働かれた。今、改めてお二人に「ご苦労様」と申し上げたい。



★バスカム先生の体当たり指導



ギル・バスカム先生と言えば、1971年から1995年まで経済学部にいりしたミッションナリーである。関西学院主催で毎年12月にシンフォニーホールでおこなわれるクリスマス音楽礼拝で、3人の博士の一人として登場するアメリカ人宣教師であった。それだけではない。学院の理事や評議員をなさっていて、宣教師のなかの重鎮でもあった。宗教活動はもとより、学校の運営をはじめ多くの委員会に駆り出されている最も忙しい外国人教師であったと言えるだろう。また、奥様のマクシンさんは、ジョイス夫人のジーンと一緒にトーストミストレス・クラブという女性のコミュニケーション能力を高める自己啓発団体の阪神グループの指導的メンバーであり、我が家の女王様は、もっぱらお二人の教えを忠実に守って勉強していたようだ。

その忙しいギル・バスカム先生に、こともあろうに、彼が高校生時代に習ったフットボールの技術を選手に教えて欲しいと頼んでみた。口では「OK、いつでも」と言ってくれたが、彼のスケジュールはすでに満杯であった。その忙しいスケジュールの合間を縫って2度ほどグラウンドに足を運んでくださった。ハンドダミーという一種のプロテクターのようなものを選手に持たせ、自分の上腕でもって、当たりに来る相手選手を止める技術を教えて下さった。もっと、もっと、多くのことを教えて戴きたがったが、関学のミッションナリーの代表であり、大学のなかの多くの委員会で役を持つ先生に、これ以上グラウンドに来ていただくことは無理な話だった。

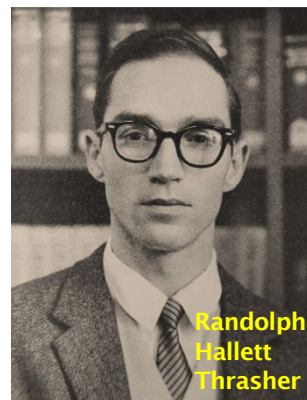
★陸上短距離走者スラッシャー先生

前編でご紹介したトム・ハリス宣教師の後任として、1968 年 4 月にランディ・スラッシャー先生が商学部に来られた。関西学院中学部の宣教師、ジュリア・碧・スラッシャー先生の父君である。英語教育のスペシャリストであり、1980 年に国際基督教大学へ移られるまで、英会話を教えておられた。

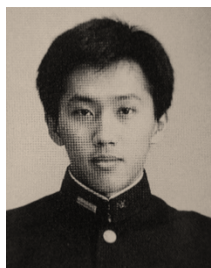
この先生は、高校の時まで、陸上競技の短距離、つまり 100 メートルと 200 メートルのランナーだったと聞く。彼とランニングの話をしているとき、スタートダッシュのデモンストレーションをしてくれたが、実に綺麗なフォームであった。

「ランディ、それぞれ。貴方のその 4 点スタンスの低い構えから飛び出すところをうちのランニングバックに教えて欲しい」と頼んで、シーズンはじめのグラウンドで、デモと指導をお願いしてみたが、なかなか時間が合わない。残念ながら、スラッシャー・コーチ誕生は実現できなかった。私は、シーズン初めか、シーズンオフに、スタートと短いランニングだけでいいのだと申し上げたのだが、彼の国際基督教大学への転勤もあって、先生のご指導を受けられなかったことは本当に残念だった。

【関西学院大学名誉教授、元理事長、元学長】



Randolph
Hallett
Thrasher



バスカム先生の思い出 ～ 外国人住宅 4 号館で触れた愛 ～

小 浪 寿 文

バスカム先生ご夫妻 (Gilbert と Maxine) が住んでおられる宣教師館 (外国人住宅 4 号館) で、毎週各 1 回、Christian Youth Fellowship (CYF) と Pathfinders (PATH) が 5 時限目に開かれていますので参加しないかと友人に誘われ、そこで初めてご夫妻にお会いしました。これらの会の違いはもう忘れてしまいましたが、バスカム先生の前任宣教師が始められた会合と聞いた記憶があります。先生が主催されていた間は、大学の卒業アルバムにも集合写真を掲載してもらっており、サークルのような集まりでした。

会合では、毎回、日本や世界で起こっている問題などが取り上げられました。それについて、参加者が自分の考えを英語や日本語で説明し、皆と意見交換を行い、バスカム先生ご夫妻が適宜コメントくださいました。大柄なバスカム先生は、見た目はちょっと怖いのですが、実はとてもやさしい方で、いただくコメントも、学生にとって非常に有意義で考えさせられるものでした。奥様も、いつも笑顔で学生たちを迎えてくださいました。手作りのお菓子を用意され、古き良きアメリカの家庭の雰囲気を感じることができました。最後に、皆で手をつなぎ (自分の右手と左側の人の左手をクロス)、「LIVE LOVE」という歌を歌い、世界が愛で満ちるよう、祈りを捧げました。また、毎年、孤児施設の子どもたちを施設まで迎えに行き、大学に連れてきて 1 日中、いろいろな遊びを一緒にする行事もあり、子

どもたちのお兄さん、お姉さんとして寄り添い続けること、成長を見守ることで得る愛を学びました。キリスト教の精神について、ご夫妻からいろいろな形で学ぶ場でもありました。先生が奥様と呼ばれると、奥様は「Do you need me?」と返されました。何気ない会話 (英語圏では当たり前の表現かもしれませんが) や、お二人の表情や雰囲気から、ご夫妻の自然な愛情を感じました。

写真は、先生のお宅で夕方から翌朝まで寝ないで、議論したり、遊んだりする OVER NIGHT と呼ばれる催しです。自由に場所を見つけて友人たちと様々な議論、話をするイベントで、目をこすりながら徹夜したことを覚えています。参加費も徴収されず、学生たちに食事や学びの場を無償で提供してくださったご夫妻。ご夫妻との交流を通して、キリスト教の愛を理解し、多くの学生が関西学院を巣立っていきました。

【研究推進社会連携機構事務部】



1985 年 5 月 18 日・19 日

スラッシャー先生の思い出 ～ 初めて褒めてくださった先生 ～

池 田 裕 子



スラッシャー先生が関学を辞めて、東京の国際基督教大学に行かれたことを知った時、少なからずショックを受けた。商学部の人と話すと、「俺たちのせいかな」と言葉を詰まらせた。

私が先生に初めてお会いしたのは 1977 年 4 月、大学 2 年時の必修科目、英語Ⅱ乙の授業だった。「英語は誰？」と商学部の先輩から聞かれた時、「スラッシャー先生」と答えると、「スラッシャーか。そりゃ大変や」と言われた。必修科目の英語が宣教師に当たると、「ハズレ」らしい。その意味がつかめないまま、授業に臨んだ。

授業中、先生は日本語を話された。教科書に指定されたのは J. K. Galbraith の *Economics, Peace, and Laughter* で、その理由を先生はこうおっしゃった。「ゴーベン(Galbraith)さんは経済学者ですから、商学部の皆さんも関心があるでしょう」。そして、授業の進め方について説明された。

- ・授業は日本語で行う。
- ・教科書の英語を一文毎、日本語に訳すことはしない。
- ・毎週 10～20 頁ほど家で読んできてもらって、どれくらい理解できているか、授業の最初にテストする。テストの前に質問を受け付けるので、家で読んでわからなかった箇所はどんな質問してほしい。
- ・それから、前の週のテストを返却し、理解できていなかった点を説明する。
- ・月に一度、英作文の宿題を出す。

後ろの席の男子学生から、こんな声が聞こえてきた。

「ゴーベンさんて誰や？」
「日本人ちゃうな。外国人やろ」
「ひょっとしてガルブレイスのことか」
「ガルブレイスが何でゴーベンになるんや」
「アメリカ人やから、よう発音せんやろ」

前の週のテストが初めて返却された時、先生は残念そうにこうおっしゃった。「皆さん、ちゃんと読んだのですか？ 全然できていませんでした」。

5 月になって、英作文の宿題が出た。なぜ商学部を選んだのか、商学部で何を学びたいのか、書いて

くるよう言われた。翌週、添削済みの作文が返された。先生は私の名を呼び、前に出て、作文を板書するよう言われた。書き終わると、声に出して読まされた。「今回、最優秀の作文です」。にっこり微笑んで、先生は解説を始められた。中学 1 年の時から英語が最苦手科目だった私は、いきなり「最優秀」と言われ、動転した。

「まず、素晴らしいのは出だしの一文、I am interested in money. 大変わかりやすい。お金に興味のない人はいませんから、続きが読みたくなります」。「次に良い点は、正直な気持ちが書かれていることです。さらに、文章は単文ばかりで、余計な接続詞も使われていません。恐らく、一度も辞書を引かずに書いたのでしょう。難しい単語も複雑な構文もありません。身に着いた言葉だけが使われているから、心に響くのです。作文とはこうやって書くものです」。ここまで来ると、褒められているのか、幼稚さを指摘されているのか、わからない。辞書を引かなかったことまでバレている。しかし、先生は本当に嬉しそうだった。そして、「この調子でどんどん書いてください」と言われた。

夏休みが開けると、先生は私たちを自宅に誘われた。「キャンパス内の宣教師館に住んでいます。○曜日の午後、ドアを開けて待っています。都合の良い人は訪ねて来てください。お茶を飲みながら話をしましょう」とおっしゃった。ところが、クラスの中で宣教師館を訪ねた学生はいなかったらしい。私も行かなかった。アメリカ人と英語でお茶を飲んで何が楽しいのかと思った。「どうして、誰も来てくれなかったのですか？」。教室に入るなり、先生はクラス中を見回して、おっしゃった。

1980 年春、私たちの卒業と同時に先生は関学をお辞めになった。もしあの時、原田の森の学生たちのように宣教師館の扉を叩いていたら、先生は関学に留まってくださっただろうか。残念なことに、私たちは「紛争世代」の後を生き「しらけ世代」の学生だったのである。原田の森時代は半世紀も前に終わっていた。

私の拙い英語をこの世で初めて認め、元気づけてくださった先生に対し、私は取り返しのつかないことをしてしまった。先生の悲しそうな目と「ゴーベンさん」の発音が、40 年経った今も心に蘇る。

【学院史編集室】



クラウチ宣教師との出会い

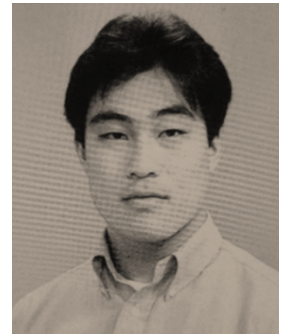
辻 学

神学部に入學した、1983 年の春のことである。火曜日 2 限目の英会話は、10 時 50 分始まりだったが、その日から 11 時半過ぎに来るよう言われていた。クラスを二つに分け、45 分ずつやるからということだった。

神学部 3 号教室のドアを開けて入ると、そこには、憂鬱そうな表情で窓越しに中央芝生を眺める、大柄なアメリカ人宣教師が一人で立っていた。マンツーマンの授業だったのである。だがそれが、新約聖書研究の長い道のりへと自分が入っていく始まりになるとは、まだ知るよしもなかった。

この 1 週間にあった事柄を簡単に報告する「儀式」が済んだ後、先生はやや当惑したように尋ねてきた。「さあ、何をしようか？」

だが、その問いを自分は、ある意味待っていた。というのは、先生が優れた新約聖書研究者だということを、牧師である父から聞いていたからである。父が、「ただの英会話じゃもったいない。どうせなら、新約聖書学を教えてもらえばいいのに」と言うのを覚えていた自分は躊躇なく、「新約聖書について教えてほしい」と応えた。その返事を聞いた先生の顔が少し明るくなったように見えたのは、気のせいだろうか。



1981 年度から神学部は、それまで長く在籍し、前年度に退任した W・D・ブレイ教授に代わる新しい宣教師を迎えていた。それがジェームズ・E・クラウチ (James E. Crouch) 教授である。クラウチ先生は、1935 年にアメリカ・インディアナ州で牧師の子として生まれた。テネシー州のミリガン大学で BA 取得後 (1957 年)、ケンタッキー州のサザンバプテスト神学校で神学を学び始め (BD、1961 年)、西ドイツ (当時) のテュービンゲン大学へ留学、1970 年に新約聖書学研究でプロテスタント神学部から神学博士号 (Dr. theol.) を取得している (指導教授: Friedrich Lang)。1968 年から 76 年まで、オクラホマ州イーニドのフィリップス大学 (1998 年閉校) で宗教および新約聖書の教授として教えた後、1980 年に、日本の関西学院大学で新約聖書学の教授をしないかと誘われたという。(声をかけてきたのは、所属教派であるディサイプルス [Disciples of Christ] でアジア宣教に関わっていた William S. Nottingham 氏であった。) その誘いに応じてクラウチ先生は日本へ来たのである。

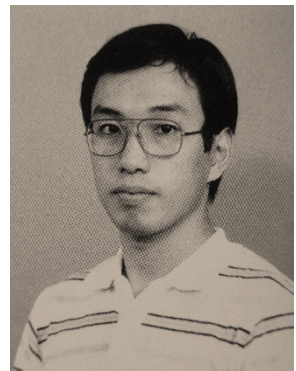
クラウチ先生がドイツで書いた博士論文「コロサイ書家庭訓の起源と意図」(原著英語) は、新約聖書のコロサイ書簡などに含まれる「家庭訓」と呼ばれる倫理的教え(コロサイ 3 章 18 節以下ほか)を扱っている。1972 年に、ドイツの著名な研究叢書 *Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testaments* (FRLANT=「旧新約聖書の宗教および文学研究」) の第 109 巻として刊行されており、「家庭訓」を扱う研究者なら今でも必ず参照する重要な文献である。まちがいなくクラウチ先生は世界的水準の研究者であり、おそらく神学部にも、「宣教師」であると同時に、新約聖書学を講じる教授という自覚を持って赴任したことであろう。



神学部に着任した最初の年 (1981 年度)、クラウチ先生が担当した科目は、大学院の「新約聖書原典研究」、そして学部の「キリスト教学Ⅱ」および「新約聖書ギリシャ語 (上)」であった。大学院の授業は、新約聖書をギリシャ語で読んでいく授業だから専門性も高い。「キリスト教学Ⅱ」は他学部にも開かれた、いわば「キリスト教学」の上級クラスのような位置づけだが、同様の授業をアメリカでの教授時代にも経験していたはずである。ギリシャ語上級も神学部の専門科目的な授業だが、ドイツやアメリカの神学部では教授が担当する科目ではないので、どういう気持ちで教えていたかはわからない。(ギリシャ語を英語で教えていたわけだから、教師も学生も大変だったろうと想像はつく。)

2 年目からは、大学院の「新約聖書学特講」(前期のみ。当時は通年 4 単位だった) が加わったが、他方で「英

会話」という授業も担当するようになった。おそらくは、責任担当時間の都合だったのでであろうと想像されるが（この年度は週 3.5 コマ）、専門性に全く関係のないこの授業は、クラウチ教授には退屈なものに感じられたようである。（クラウチ先生の名誉のために：神学部他の先生たちも、英語やドイツ語の授業を担当していたが、モチベーションが高いとはお世辞にも言えなかった。学生から間違いを指摘されて、「僕は語学の教師じゃない！」と居直った教授のことは今でもよく覚えている。ドイツ留学から帰国したばかりの助手の先生は、我々学生のレベルに呆れているようだった。後の指導教授は、英語を楽しそうに教えてくれた。ただしテキストは、当時の 1 年生にはやや難しい、古い英語の講演録だった。）ちなみに、大学院の特講に出席していた当時の学生の中に、現神学部長の中道基夫教授【写真右：神学部 4 年時】や、日本キリスト教団淡路三原伝道所の佾真人牧師がいる。新約聖書学を専攻していたお二人は、クラウチ先生と非常に親しく付き合い、先生の帰国後も親交が続いたとのことである。



◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「新約の研究について教えてほしい」なんて、まだ 1 年生で、何も知らないから言えたのかもしれない。しかしその無謀な願いにクラウチ先生はすぐに応じてくれた。次の週から、The Interpreter's Dictionary of the Bible の項目（たしか「イエス」だったように思う）を読みながら、新約聖書研究の方法について解説してもらった授業が始まった。まだ素人同然な上、英語での授業だから、どれだけ理解できたのか甚だ心許ない。だが、そこで初めて「伝承」や「様式」について聞いたように記憶している。それは自分が初めて触れた本物の「学問」の世界だった。イエスと新約聖書の間にある「距離」の話は、知的好奇心を刺激してやまなかった。あの経験こそが自分を、新約聖書研究の道へと誘ったのだと思う。その意味で、本当に貴重な英会話の時間だった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

クラウチ先生は確かに「教授」だったが、もちろん「宣教師」でもあった。先生は優れた説教者で、神学部チャペルではいつも印象的な話をされた。（参加者がいつも少ない）木曜日のチャペルアワーを担当された時のことである。先生は、「小さなチャペル」という題で、小さいこと、弱いことが持つ逆説的な意義を語られた。その内容は今でも心に残っている。毎週のメッセージ担当者を記す、1 階事務室前のボードに自分の名前を漢字で「倉内」と書かせておられたのが、なんともぴったりの感じで笑えたものである。（確かに、耳で名前を聞いただけだと、日本人かと思ってしまう。）

関西学院大学での 4 年間、クラウチ先生は、阪神地区の教会の牧師と交流を深め（それで父がクラウチ先生をよく知っていた）、日曜日には主として日本キリスト教団甲陽園伝道所（西宮市）の礼拝に参加し、協力教師も務めた。しばしば礼拝説教も担当したが、その説教 12 編を集めた冊子が、先生の帰国直前に翻訳出版されている（自費出版）。『EMMANUEL——神 われらと共にいます——』と題されたその説教集は、神学部の同僚で親しい友人でもあった宮谷宣史教授（故人）と、上述の佾真人・中道基夫両氏の編訳によって実現した（説教集を提案したのはこのお二人だったとのこと）。いま読み返しても、心が温まる、そして時に切なくなる説教ばかりである。とくに、帰国を決めた 1984 年の 7 月末に甲陽園伝道所で語られた、「あがなわれる過ち」という説教からは、わずか 4 年で関西学院の職を辞し、アメリカへ戻ることを決めた（いや、決めざるを得なかった）クラウチ先生の心の内が聞こえてくるような気さえする。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「クラウチ先生は日本を離れます。彼のような、真剣に学問を営み、真実に福音を求め、本音を語り、偽善や根まわしを嫌い、権力や名誉を好まず、人間であることを重んじ、喜びをもって生きようとする人間を、日本の大学や教会はうけとめることが出来ないのでしょうか。」説教集『EMMANUEL』の「訳者あとがき」に書かれたこの言葉から垣間見ることができるのは、クラウチ先生の離日が幸せな「任期満了」ではなかったということである。実際、先生がわずか 4 年で関西学院を離れるに至ったのは、決して本意ではなかった。宣教師としての活動をめぐって、意思疎通がうまく行かなかったと聞く。

いずれにせよ神学部は、世界的に名の知られた新約聖書学者を失うことになった。クラウチ先生からもっと多くを学びたいと願っていた学生は誰もが失意のうちに教授を見送ることになり、その中に自分もいた。



クラウチ先生は、1985年3月をもってアメリカへ帰国された。帰国後、先生はまず、ヴァージニア州北部にあるアレクサンドリアという町で牧師代務者を務めた後、デラウェア州ウィルミントンにある教会の牧師代務者、さらには正式な牧師となった。その教会が閉鎖になった後には、隠退前の1年間、同州ベサニー・ビーチで教会設立に関わっている。

教会での働きを続ける一方、先生は執筆活動にも熱心に取り組んで来られた。ドイツ語圏の有名な新約聖書注解叢書 *Evangelisch-katholischer Kommentar zum Neuen Testament* (EKK=「新約聖書のプロテスタント・カトリック注解」) に、ウルリッヒ・ルツ (ベルン大学名誉教授、2019年没) のマタイ福音書注解全4巻があるが、この超大作を英語に訳したのはクラウチ先生である (Hermeneia 注解叢書から刊行)。先生のドイツ留学経験が、数十年を経た後にこうして活かされることとなった。

また先生は、小説を立て続けに書いて、自費出版しておられる。昨年のクリスマス前に送られてきたのは、『時の間』(Between the Times) という (見る人が見ればピンとくる) タイトルの小編で、チュービンゲン留学時代の副指導教授であったエルンスト・ケーゼマンを題材にしている。ケーゼマン教授は、第二次世界大戦時に兵隊としてギリシャへ派遣され、九死に一生を得る苛烈な経験をした。その後、戦時捕虜となり、解放後に故郷へ帰還している。この一連の出来事をフィクションの形でドラマチックに描いたのが、この作品である。



自分がいま新約聖書研究に携わってられるのは、神学部で過ごした8年半の間に (大学院後期課程3年の夏までいた)、関学内外の優れた新約聖書学者と次々に出会い、教えることができたからに他ならないが、その出発点にいたのは、まぎれもなくクラウチ先生である。先生が神学部におられた短い年月の間に、そこで学生だった幸運を、今さらのようにありがたく思う。

先生が帰国された後、ずいぶん長く音信不通だったが、関学に勤め始めてしばらく経った頃、先生から突然Eメールが来た。それ以来、再び連絡を取り合うようになって今日に至っている。先生も今年で85歳。できることなら、近いうちにアメリカへ行って再会を果たしたく思う。

【広島大学教授、学院史編纂室研究員、元商学部宗教主事(1997~2007)】

『総合研究カナダ』の刊行

Understanding Canada: An Interdisciplinary Approach

関西学院大学出版会 2020年4月20日

A5判 201頁 本体価格2,800円+税



カナダのメソヂスト教会が関西学院の経営に参画したのは、今から110年前の1910年でした。当時、関西学院は、創立の地、原田の森 (現在の神戸市灘区) にありました。最初に関西学院に派遣されたカナダ人宣教師は、C. J. L. ベーツと D. R. マッケンジーの二人です。今年は、ベーツが第4代院長に就任して100年でもあります。

この記念すべき年に、『総合研究カナダ』(編著: 水戸考道、大石太郎、大岡栄美、著: 池田裕子、神崎 舞、木村 仁、木村裕子、真田桂子、友武栄理子、マッケンジー・クラグストン) が刊行されました。

第12章「日本と私」(訳: 田邊 信) では、“Missionary kid” として上ヶ原キャンパスで育たれたクラグストン特任教授が、祖父母の代から続く中国や日本との関りについて語っておられます。

『学院史編纂室便り』第51号 (2020年5月1日)

関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ヶ原 1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>